



まちの駅ニュース

人と人の出会いと交流をサポートする
まちの情報発信基地

1. 「まちの駅ネットワークみつけ」を訪問してきました

まちの駅ネットワークとうがね 宮原政志

『まちの駅ネットワークとうがね』は、市役所・観光協会・商工会議所・社会福祉協議会・文化会館・青年の家・道の駅・郵便局、そして市中の商店主らがバランスよく加盟しています。私たちは災害などの非常時に成果を発揮できるように、普段から横の繋がりを強めることを心がけています。

昨年、千葉県を襲った台風災害や、今回のコロナ禍を振り返るにつけて、話題に出るのが、もう少し『人・モノ・情報』が集まる求心力のある場所を持ちたいねということです。単に立地の話ではなく、皆が価値を共有できて日常的に集える場所とか。

そんな時、見附市にはそのモデルともいえる理想的な施設があるという話題になり、では行ってみようという事になりました。とはいうものの、コロナ禍だし先方も迷惑なんじゃないかと戸惑いつつ、橋本事務局長に繋いでいただいて、10月23日に押し掛けてしまった次第です。

『ネーブルみつけ』はまさに「まちの駅ネットワークみつけ」の中央駅。元ショッピングセンターの建物に市のまちづくり課があり、「まちの駅みらい市場」という観光物産協会の農産物直売所や、子育て支援センター、スポーツジム等も同居、各駅の情報コーナーも充実しています。私たちの訪問は平日でしたが、たくさんの市民が施設を利用していました。

その後も、ネットワーク代表の久住幸靖さんと見附市地域経済課の山田朱音さんの丁寧な案内で、若手就農者が経営する直売所、旧商店街にあるお茶屋さん、森林公園の中のログハウス等のまちの駅を訪ね、駅長さんたちの話を伺うことができました。最後に地酒専門店のまちの駅でちょうど日が暮れてお別れ。メンバー同「まちの駅ネットワークみつけ」の皆さんの地域愛とおもてなしに感激しきりでした。

私たちはこれまでも各地のネットワークを訪問してきました。それぞれの土地の方々と交流すると、自分たちとの違いや共通点などを知り、地域の特性や組織の課題を見直すきっかけになります。

見附市の皆さまに感謝。全国フォーラムで再会する楽しみができましたね。



2. 佐久市まちの駅を訪問

長野県佐久市は、群馬県との県境に位置する東信地方の市です。千曲川流域の佐久盆地にあり、古くは中山道と佐久甲州街道とが交差する宿場町として発達しました。佐久市臼田町には「日本で海から一番遠い地点」があります。

現在、佐久市のまちの駅は15駅であり、事務局は市役所内にある佐久市観光協会が担っています。11月20日、観光課の市川裕也さんを訪問しました。

佐久市は平成19年より、健康のまま天寿を全うする意味の”ピン・ピン・コロリ”にあやかり、「ぴんころ運動推進事業」を展開しています。佐久市野沢の成田山参道には「ぴんころ地蔵尊」が祀られており、傍らにある「山門茶寮」はまちの駅「健康長寿の里 ぴんころ地蔵」となっています。1階が喫茶と土産売り場、2階がギャラリーです。(写真上)

佐久市臼田にある「龍岡城五稜郭」は、函館五稜郭とともに日本に2つだけという星型の洋式城郭で、江戸時代末期に築かれました。まちの駅「であいの館」は、龍岡城五稜郭のすぐ隣にあり、龍岡城五稜郭の資料が展示されています。五稜郭保存会の方が、お茶を出したり、説明をしてくれます。(写真下)

また、大澤酒造(株)内に併設されている酒蔵民俗資料館、しなの山林美術館、名主の館書道館も「中山道茂田井間の宿 まちの駅」になっており、美術鑑賞や試飲などが楽しめます。



3. 来年のまちの駅全国大会は見附市で8月27日～28日を開催候補日に

コロナ禍のために2020年度の「まちの駅全国大会」は開催を見合わせました。そこで、来年度のまちの駅全国大会ですが、見附市での開催を予定しています。「まちの駅ネットワークみつけ」と本部事務局で、令和3年8月27日（金）～28日（土）を開催候補日として調整しているところです。例年通り2日間の日程で考えていますが、収束が見えない新型コロナ感染症やその他の状況によっては変更になる可能性もあります。

4. 姉妹まちの駅交流会(オンライン懇親会)

昨年度、まちの駅姉妹締結を結んだ「まちの駅ネットワークかぬま」「まちの駅ネットワーク焼津」「会津まちの駅ネットワーク」「あらわか区まちの駅ネットワーク」では、今年度もお互いに行き来する予定でしたが、コロナ禍により難しくなりました。そこで、ZOOMを使ったオンラインで交流会を開くことになりました。

関係人口づくりの相互応援が出来るようにと、まずはお互いの地域を知ることから再スタートです。

第1回 鹿沼まちの駅の日

第1回目は「鹿沼まちの駅の日」と題して、10月14日の17時30分から19時まで、ZOOMでつないで情報交換を行いました。事前に鹿沼市から鹿沼物産品が各まちの駅ネットワークと本部事務局に送られ、それを食しながらの懇親会としました。鹿沼市から送られた物産は、「いちごワイン」「ピリ辛こんにゃく・さんしょ煮」「ゲンコツせんべい」「鹿沼土みたいなスナック」「はとむぎサブレ」「深岩石のクリスピーショコラ」。それぞれの説明を聞きながら、美味しくいただきました。

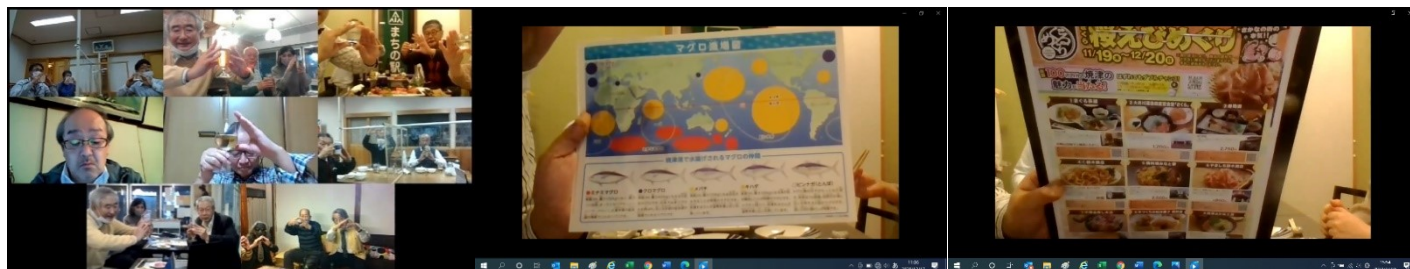
鹿沼のまちの駅メンバーはまちの駅新・鹿沼宿に集まって、それぞれ一言ずつ近況報告を行いました。本部事務局は、昨年度の「鹿沼いちごツアー」に参加していちご市民になったメンバーに声掛けしました。各地域ともコロナ禍でご苦労されていましたが、皆さん元気そうで何よりでした。



第2回 焼津まちの駅の日

第2回目となる「焼津まちの駅の日」は、11月25日に開催しました。静岡県ですので「富士山乾杯」でスタートしました。焼津市はマグロの水揚げ量日本一のまちです。事前に焼津から送られたのは南半球で獲れる「ミナミマグロ」でした。しっかり冷凍しており、鮮度のいいマグロをお刺身でいただきながら、マグロの種類に関して解説してもらいました。さらに、駿河湾といえば桜えび。ここ数年は不漁が続いていますが、しっかりと冷凍保存された桜えびがあるとのこと。11月19日から1ヵ月間「桜えびめぐり」が行われ、桜えび三昧の食事が楽しめます。

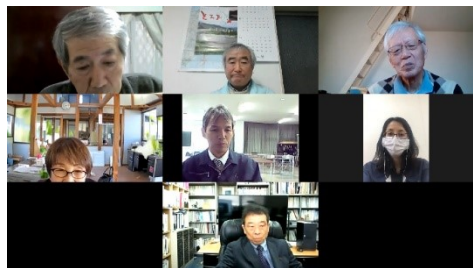
また、焼津市観光協会では観光庁「誘客多角化等のための魅力的な滞在コンテンツ造成実証事業」に採択され、11月28日に「焼津漁船クルーズ」というイベントが開催されることが報告されました。昨年の「まちの駅全国大会 in やいず」のエクスカッションで評判だったプログラムを常設化しようという企画です。



第3回は、「会津まちの駅」の日として、令和3年2月12日に開催される「会津絵ろうそくまつり」を中継して、楽しんでもらう予定で調整中です。10,000本の蝋燭のあかりに照らされて雪景色に浮かぶ会津の幻影を、オンラインで見たいだこうという趣旨です。

5. まちの駅同業種交流オンライン会議

コロナ禍で制限が続く中、本部事務局でも7月からZOOMを使った“まちの駅懇談会”を試行してきました。その中で「まちの駅の同業者同士の集まりが出来たら、いろいろなヒントが得られるのではないか」という話になり、まちの駅になっている商工会議所関連の方とのオンライン懇談会を、12月21日に行いました。



広島県廿日市市、埼玉県本庄市、福岡県粕屋町のメンバーが参加し、相互の近況報告と情報交換を行いました。

廿日市のまちの駅からは、約100駅あるまちの駅ネットワークのキーステーション施設が、令和4年4月から開設されることが報告されました。

本庄からは、コロナ禍で、総会を始めまちの駅の活動がほとんどできなかったが、広報委員会だけは開き、まちの駅マップの改訂を行ったことが報告されました。スタッフ会議と駅長会議は1月に実施する予定とのこと。

粕屋町からは、まちの駅を紹介するYouTubeを作っていることが紹介されました。また、全国で唯一、県立福岡魁誠高等学校がまちの駅になっており、毎年文化祭ではまちの駅コーナーが設けられ、学習の一環として活動しているそうです。その他、公の場所、例えば図書館・文化施設・病院・郵便局など珍しいところがまちの駅になっていることが報告されました。

コロナ禍によってリモート会議を「やらざるを得ない状態」になっています。まちの駅のデジタル化については、駅ごとで活用レベルの差が大きいことが指摘され、各まちの駅のインターネット活用支援が必要だということが確認されました。

今後のオンライン会議については、同じ町の同業種はライバル関係なのでざくばらんに話をするのは難しいが、遠く離れた地域の同業種であれば話がしやすい。また、何か話題性がないとなかなか人集めがしづらいので、面白い人や変わった人をスピーカーにすることや、いろいろなまちの駅に関して「〇〇賞」を出して表彰するという提案が出ました。簡単な報告は、<https://machinoeki.jimdofree.com/>に掲載しております。

6. まちの駅青梅の Made in OME 企画が「観光庁事業」に採択されました

東京都青梅市は、新宿から電車で約1時間。江戸時代には宿場町として栄えた歴史があり、自然にも恵まれた地域です。とは言え、奥多摩方面にはハイキングや多摩川上流の川遊びなど自然を楽しむ行楽客は多数いますが、青梅市はその通過点となっている点が指摘されています。そこで、青梅の魅力を発信し、Made in OMEの商品を販売しようという趣旨で、平成28年11月に株式会社「まちの駅青梅」を設立し、社長で駅長の和田保彦さんが運営しています。

このたび、和田さんが中心となって「Made in OME」をキーワードに、青梅の新たな商品開発と地産地消体験マイクロツーリズムを企画し、観光庁の公募事業「誘客多角化等のための魅力的な滞在コンテンツ造成実証事業（第二次）」に応募して採択されました。実施主体は(株)まちの駅青梅で、全国まちの駅連絡協議会も連携団体に名を連ねています。12月24日、FAMトリップが開催されました。参加者は、専門家からMATCHA（訪日外国人向け情報発信メディア）の青木優社長、(株)BRAND JAPAN（中国インバウンド戦略・PR宣伝）の李思萱社長、淑徳大学観光経営学科の千葉千枝子教授、ミレニアル世代を代表してアソビシステムモデルの矢部ユウナさんとMIOCHNさん、旅行会社からは(株)HISとNPO法人交流・暮らしネット、(一社)ジャパンショッピングツーリズム協会という顔ぶれ。視察先は小澤酒造（清酒澤乃井）、玉堂美術館、かんざし美術館、繭蔵（創作料理）、(株)ホットマン（一秒タオル）、壺草苑（藍染）、JR青梅駅周辺の市街地散策（ねこまち、昭和レトロ、津雲邸）等々、盛りだくさん。

2月21日（日）には、2コースのモニターツアーと事業報告フォーラムが開催され、それらの成果を取りまとめて、来年以降の取り組みに生かしていく予定です。全国まちの駅連絡協議会でも共有して、各まちの駅の取り組みに参考にしてもらうべく発信していきます。



今も使われている小澤酒造の元禄蔵



清々しい多摩川の上流



玉堂美術館の庭園



ホットマンのタオル製造工場

7.『コロナ移住のすすめ』の著者、藻谷ゆかりさんを訪問しました

『コロナ移住のすすめ』（毎日新聞出版）には、家族で移住した経験をベースに、地方移住を決断する上での心構えや実際の移住事例が提示されています。著者の藻谷ゆかりさんにお会いし、コロナ移住の展望を伺いました。

※本稿は、地域づくり雑誌『かがり火』196号から抜粋・編集したものです。

— 東京の若者の3人に1人が地方移住に関心を持っているそうですね。

藻谷：若者の話を聞いていると、コロナ禍によってテレワークが増え、それまで寝に帰るだけの家に籠って仕事をすることになり、通勤しない快適さに気づいたり、住環境のいい地方に移ることを考えているようです。

都会では地方に田舎を持たない世代が増えており、おじいちゃんおばあちゃんが地方にいない子ども達は、お盆や正月に田舎に帰ることにあこがれを持っています。かつての「金の卵」の孫たちが、新たな「金の卵」として地方に戻って活躍するようになるといいですね。

— 一方、地方にはいまだに東京への憧れがあるように見えます。

藻谷：東京を憧れる人は少なからずいます。東京志向は個人の信条や嗜好なので、悪いこととは思いません。とは言え、今はインターネットの普及で、どこにいても何でも買えます。また、飛行機や新幹線でいつでも東京に行けるので、東京との関わり方の選択肢はいろいろあるわけです。例えば、本書で紹介したフリーライターの江戸しおりさんは、福井県勝山市に移住しながら、毎月一週間は大好きな東京に滞在して仕事をしています。

— 若い世代は所有欲求から存在欲求へ移行しているとのことですが、確かにバブル崩壊後の好景気を知らない若者は、一方でモノに溢れた中で育っているので、我々とは違った価値観を持っていると感じます。

藻谷：若い世代でパラダイムシフトが起こっており、今の若者はお金を稼いで高価なモノを持ったり、立派な家を買うことに満足を感じるのではなく、古い家でも自分たちで工夫して快適に暮らすことを目指すようになっています。

団塊の世代やその次の世代は、高度経済成長の成功体験から抜け出されませんが、経済成長を知らない若い世代は、もっと地に足がついた考え方をしています。拡大志向を持たない若者に対して、上の世代は海外志向やもっと欲を持ちなさいと言うことがありますが、若者は自分なりにしっかり考えているので、私は心配していません。上の世代こそ、自分達がこういう社会にしまったのだという認識を持たないと、今からの政策を間違えてしまうのではないのでしょうか。

— コロナ移住を進めるには具体的にどうしたらいいのでしょうか。



藻谷：移住の受け入れ側として、まずは住居を提供しなければいけません。安くて状態がいい賃貸物件を出すことが重要です。それは自治体の努力に係わります。空き家は商売になりにくく不動産屋が扱わないので、どこでもパブリックセクターが取り扱っています。短期的には自営業やテレワークが出来る人が来るので、行政の住宅政策対応が問われると思います。

また、孫ターンや嫁ターンなど、いろいろな移住のパターンがありますので、柔軟な対応が必要です。長野県上田市で嫁ターンが多い理由は、女の子を大事にする風土があるからでしょう。逆に福井県や富山県で若い女性が都会に出て行って戻らないのは、長男を特別扱いする風潮が根強く残っているので帰って来ないのだと思います。こういうことは、時間をかけて地域社会全体が変わっていくしかありません。

— 地方移住を考える若者が増えていても、実際に移住するかどうかは違ってきます。漠とした思いを具体化させるために必要なことは何でしょうか。

藻谷：移住のハードルを低くすることが重要です。例えば、鯖江市の「ゆるい移住」は、言葉自体がハードルを下げるので、とても有効だと思います。1年だけの事業でしたが、その時に移住した人が今も残って活動をしています。福井県全体で「ゆるい移住」を取り組めるといいのかもしれませんが、一自治体の取り組みを県全体に普及させるのは意外と難しいのかもしれない。

それから、生活の全部を移すのではなく東京に拠点を置いたままの移住から始めてもいい。それでも、地方での暮らしが長くなると東京との係わりが減っていき、東京に行く必要がなくなります。

— 藻谷さんは、主観・客観・直観の中で、直観を大事にして決断されています。一方、未来予想ではAIが必要な食事や運動メニューを決め、最適な音楽を選択してくれるような世界を描いています。これではAIの家畜になるというイメージを持ってしまう。

藻谷：AIは「過去の客観の総体」ですから、これからはますます直観が大事になると思います。また起業にしろ、移住にしろ、自分が選んだ道を正解にすることが出来るかどうか問われます。そのためには、客観よりも自分で考える主観や直観を必要とします。例えば、人から小布施町や軽井沢町が素晴らしいと言われると何となくそう思い込んでしまいますが、そうした周りの意見に自分の考えが流されないためにも、直観を大切にすることが重要なのです。